

春楊 はる やなぎ

葛城山に かつら き やま たつ雲の

立ちても坐ても 妹をしそ思ふ

柿本人麻呂歌集(巻十一・二四五三)

『万葉集』巻十一は「柿本朝臣人麻呂の歌集」にあった149首から始まります。柿本人麻呂は天武天皇・持統天皇のころに活躍した『万葉集』を代表する歌人の一人ですが、自ら歌を作るだけでなく、すでにあった歌を歌集に書き留めていたようです。『万葉集』は漢字ばかりで書かれており、人麻呂歌集の歌は文字数が少ない傾向があります。今回の歌の原文は「春楊 葛山 發雲 立座 妹念」。これで5・7・5・7・7の31首を表しています。たった10文字で一首を示すのは、同じく巻十一・二四四七の人麻呂歌集と並んで、『万葉集』中、最少です。

やまと
万葉がたり

この歌は「春楊」から始まっていますが、葛城山を導くための前置きで、春の楊そのものを詠んだわけではありません。「葛」は蔓草でクスともカツラとも訓みますが、ここでは「かづらき」の地名を表しています。楊はよく「かづら(かすら)」(髪飾り)にされました。動詞では「か

づらく」となります。

「雲は雨や遠き、遮るものとしてイメー

日差し

地といえます。

その「かづらき」山に

たつ雲のように、立つても座っても妹(女性)

日差し

のこを思う、という

歌で、雲を比喻に用い

山々を見渡すだけでも

ています。立つ雲、居

イメー

山々を見渡すだけでも

る雲、どちらも歌によ

作歌には他にも春日、

山々を見渡すだけでも

く詠まれますが、「居

三輪、吉野など数々の

山々を見渡すだけでも

【訳】春の楊を纏

(髪飾り)にする葛城

山に湧き立つ雲のように、立っても座つても妻をこそ思ふよ。

山に湧き立つ雲のよう

立っても座つても

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

妻をこそ思ふよ。

たまきはる 宇智の大野に 馬並めて

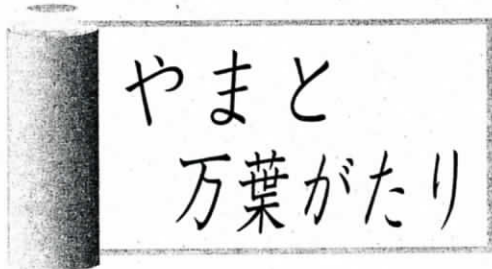
朝踏ますらむ その草深野

中皇命(巻一・四)

で一層具体的に描写します。五條市の「宇智」が、舒明天皇の猊の場でした。5月5日に猊をする行事があったので、その時期だったかもしれません。

『万葉集』巻一は雄略天皇の長歌から始まり、2番の歌が舒明天皇の国見歌で、3、4番が「天皇の、宇智の野に遊猟し、し時に、中皇命の間人連老をして献らしめたまへる歌」です。今回掲載の4番歌は3番の長歌に付随する反歌です。中皇命とは舒明の皇女・間人皇女

かと言われています。歌を作るには若く、皇女を世話する一族の「老」という人が皇女の立場で詠んだと考えられます。さぞかしお年寄りかと思ってしまうのですが、「老」は名前です。『万葉集』には「老」、「老麻呂」などの名を持つ人物が10例ほど見え、人名の名前だったようです。



3番の長歌、「やすみしし わが天君の朝には とり撫でたまひ 夕には い縁せ立たしし…… 御執らしの 梓の弓の中弭の 音すなり」は、『古事記』によく似た歌があります。袁村比売が雄略天皇に歌った「やすみしし 我が大君の 朝には い倚り立たし 夕には

い倚り立たす 脇机が下の 板にもが 吾兄を(記103番)で、「雄略天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。『万葉集』3番歌では、「父・舒明天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。『万葉集』3番歌では、「父・舒明天皇が朝も夕も愛用しておられる、膝置きの下の板になりた」という歌です。

【訳】 靈魂のきわまる命——宇智の広々とした野に馬をつらねて、朝、踏んでおられるでしょう。その草深き野よ。

「たまきはる」の枕詞は「内」「命」にかり、内在する生命力を想起させる語です。この歌を読むと、獲物が潜む草深い山野が眼前に広がります。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)